

April
号外
2016

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞
上町台地
今昔タイムズ



上町台地 今昔フォーラム
vol. 5 Document



企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング／発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所(CEL)

問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当: CEL弘本) ※U-CoRo=ゆーころ(上町台地コミュニケーション・ルーム)

ホームページ <http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html>

第5回「上町台地 今昔フォーラム」を開催。 「タイムスクープ! 身近なまちの映画館の消息を追って」 — 遺された資料でよみがえる戦前・戦後の地域の生活史



▲壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」
第5号(1面)

大阪のまちが急速に拡大し、やがて過酷な戦災から復興へと疾走した時代、それはちょうど映画文化の誕生と隆盛の時代に重なります。上町台地をとりまく、映画館の盛衰の軌跡をたどると、身近なまちとそこに生きる人々の喜怒哀楽、地域の生活史が浮かび上がります。

このフォーラムでは、導入レクチャーで大阪のまちの変容と映画館の関係を紐解き、戦災等を乗り越えて暮らした傍らで保存してきた、貴重な資料の数々をスライドショーで公開。往時の映画文化の実体験談と、映画史・大衆文化史・建築史等の専門家の知見を交え、まちの記憶をよみがえらせていました。専門家と市民がともに資料を掘り起し読み解く試みが、地域の未来につながっていくことを願っています。



- 日時：2016年2月28日(日) 14:00～
- 場所：大阪ガス実験集合住宅 NEXT21
2階ホール(大阪市天王寺区清水谷町6-16)
- 主催：大阪ガス エネルギー・文化研究所(CEL)
企画：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
- プログラム：
導入レクチャー 講師 笹川慶子氏(関西大学文学部教授)
スライドショー&トーク コメンテーター
坂本健一氏(青空書房店主)
橋寺知子氏(関西大学環境都市工学部准教授)
古川武志氏(大阪市史料調査会調査員)
交流会



当曰は空堀のちんどん芸能
集団東西屋のみなさんに、
無声映画で使われた音楽を再現演奏していただいた。



※プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。

スライドショー

「上町台地 今昔タイムズ」の第5号を制作していくうえで、地域の方々から非常に貴重な資料のご提供をいただきました。そのなかから、未掲載のものを含めて、ここで改めてご紹介します。



玉造座の半額券。当時、玉造座は大阪の映画会社である帝国キネマ直営。元は歌舞伎の劇場で花道が残り両側が桟敷席になっていたという。実演は「四ッ谷怪談」と「引き抜千本桜」。映画は1927(昭和2)年公開の「紺鹿子草紙」。「若き血に燃ゆるもの」は1930(昭和5)年作品。



玉造の日之出館の招待券には「ADMISSION TICKET」の表示とシンジン目。同館のモダンな外観をイラストで描いている。



昭和初期の日之出通商店街の写真。この通りには、朝日座、日之出館、洋画専門のヤマト館、元は劇場だった玉造座などの映画館が並んでいた。戦前から戦中には、近鉄線で鶴橋に来て、そこから歩いて砲兵工廠に通勤する人が多く、当時、玉造は心斎橋と並ぶ賑やかさと言われた。



日之出館のご家族優待券には、「大東亜・大マキノ映画封切場」の表示。

玉造座の割引券。山田五郎と岡本五郎の「合同大連鎖劇」の文字。「赤い白鳥」「時代の反抗児」は、ともに帝国キネマの1930(昭和5)年作品。

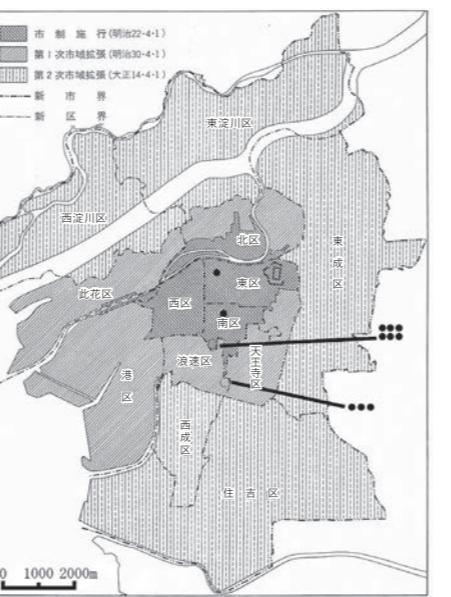
●導入レクチャー

大阪のまちの変容と 映画館の関係を紐解く



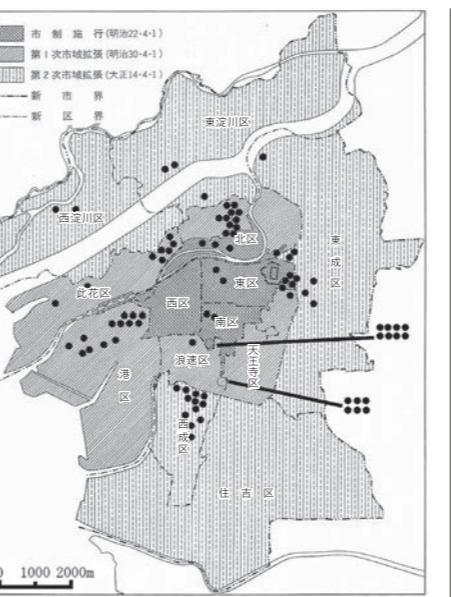
笹川 慶子氏（ささがわ・けいこ）
関西大学文学部教授

1998年、早稲田大学文学部演劇専修卒業。
2004年、早稲田大学博士課程文学研究科芸術学（演劇映像）専攻単位取得満期退学。専門は映画史、映画美学。著書に『明治・大正 大阪映画文化の誕生—「ローカル」な映画史の地平に向けて』（2012）、『大阪に東洋1の撮影所があった頃（新なにわ塾叢書）』（共著、2013）、『フィルム・アート—映画芸術入門』（共訳書、2007）ほか。



1912（大正元）年頃の大阪市内の映画館分布図

※『新修 大阪市史』第7巻（1994）掲載の図版「市域の拡張」に映画館の分布状況をポイント（笹川慶子『明治・大正 大阪映画文化の誕生』より）



1926（大正15）年頃の大阪市内の映画館分布図

大阪の映画文化の誕生と変化

大阪の映画文化は、いつどこで誕生して、またどう変わっていたのでしょうか。

1889（明治22）年に大阪市が成立した当時、その範囲は、中心部の東区、西区、南区、北区だけでした。1897（明治30）年の第1次市域拡張の際は、各区の周辺部が編入されますが、区分けはそのままで、やはり東西南北の4区。しかし、1925（大正14）年の第2次市域拡張では、前回に編入した部分を切り離して新たに4区を

つくるとともに、さらにその周りに5区を加えています。これが「大大阪」と呼ばれる、未曾有の繁栄を謳歌した時代の大坂市のかたちでした。このとき、大阪は人口と面積で東京を抜いて全国1位の大都市となつたのです。

映画文化は都市の変容と密接な関係を持っています。1912（大正元）年に大阪市にあった映画館の分布を見ると、千日前や新世界など、最も古い頃の大坂市域の南端に集中しているのがわかります。そ

れが、1926（大正15）年になると、館数は

だいぶ増え、かつ分散していきます。

映画には、その先行芸術である演劇とは異なり、撮影機と映写機が必要でした。この装置は、19世紀末にフランス、アメリカ、ドイツでほぼ同時期に開発されました。もとは視覚的なおもちゃなどに使われていた技術を応用したもので、その開発地は当然科学技術が発達していた国でした。

当時の日本には、そのような資本も技術もなく、映画においては輸入国でした。最初に輸入されたのは、1896（明治29）

年のアメリカのエジソン社のキネトスコープで、次がフランスのリュミエール社のシネマグラフ、そしてエジソン社のヴァイタスコープでした。輸入したのは、神戸の輸入商・高橋新治や京都の実業家・稻畠勝太郎、心斎橋の輸入商・荒木和一といった関西の面々。そして日本で初めて料金を取った商業的な興行がなされたのが、大阪難波の「南地演舞場」でした。ここは名前の通り映画館ではなく、芸妓の踊りや寸劇などを見せていましたところ。つまり映画は最初は舞台の見世物の一つ。上映されたのはニューヨークの電車の映像などで、音も色もない数分の短いもので

した。内容の説明が必要となり、その説明者が後に弁士になっていきました。

都市の変容と 映画文化の密接な関係

興味深いのは、映画を芝居小屋などで上映したが故に生まれた日本の映画文化です。例えば、映画館なのに舞台がある。また花道がある。出語りのための場所があり、座敷席がありと、まるで人形浄瑠璃の小屋。観客も、スクリーンに向かって拍手し声をかけ、食べて飲んで、話し笑う、まるで芝居見物でした。

また芝居小屋で上映したために、新たに生まれたのが「連鎖劇」でした。これは演劇と映画をミックスした劇で、車の追っかけなど野外場面は映画を上映し、見せ場になると映画館のスクリーンが上って俳優が出てきて演じるといったもの。大阪では特に盛んで、千日前の「楽天地」は連鎖劇のメッカと言われました。

では、映画専門の映画館はいつ誕生するのでしょうか。1904～1905（明治37～38）年に日露戦争があり、それを契機に初期の映画ブームが起ります。大阪では1907（明治40）年7月に「電気館」が千日前に開場、これが大阪初の映画専門の劇場でした。ちなみに、日本初は1903（明治36）年開場の東京浅草「電気館」で、大

阪の「電気館」は全国2番目の専門館。その後は、千日前に「帝国館」「世界館」「三友俱楽部」「芦辺俱楽部」などが次々とつくられ、わずか4年で「映画街」のような空間が誕生します。ここは伝統ある道頓堀とは違い、明治初年までは墓地だったところ。土地代が安く、そこに小規模の小屋が集まっていたので、次々に映画館に変り易かったです。

映画人気は、やがて千日前の外にも広がります。まず1911（明治44）年、道頓堀の「朝日座」が新派の芝居小屋から映画館に変わります。また同年、船場の御靈神社の近くに「御靈俱楽部」が誕生。さらに1912（明治45）年に新世界が開業し、いろいろな映画館が建ち並びます。

拡散の大きな転機は、実は大火でした。1912（明治45）年1月に起こった、いわゆる「南の大火」で千日前がほぼ全焼し、映画館街もほとんどが焼失します。その後復興までの期間、焼け出された映画興行主は、新世界や九条、天満といったところの芝居小屋を借りて映画上映を始めます。一方、千日前は復興後はモダンな歓楽街に生まれ変わり、定員1000人クラスの劇場が建ち並びます。とりわけ新たに登場した巨大娯楽場「楽天地」は、大正時代の千日前を象徴する場所となりました。ここは、南海鉄道がターミナル駅近くに

スライドショー つづき



城東館・城劇の50余年の物語 ~水野千鶴子さん所蔵資料より
水野千鶴子さんの祖父が、大正時代から玉造駅の北西で「城東館」を経営。戦前・戦後を通じて人気を博しました。それぞれの時代の写真がアルバムなどで残されています。



大正時代の城東館の外観は、正面の2つの塔が象徴的。上映しているのは無声映画で、絵看板も額に入った芝居小屋風の趣。向かって左手に切符売り場と入口。右手の看板には「一週間各土曜日毎二取替」の文字。



城東館専属の
樂隊の人たち。
同館前で撮影。



映画館の入口で記念撮影。上映中の「落第はしたけれど」は小津安二郎の監督作品で1930（昭和5）年公開。「突貴小僧」も小津監督の1929（昭和4）年作品。ともに松竹キネマ制作の無声映画。



城東館の関係者。
後列の左から、技
師・太夫・弁士・弁
士。前列は、技師・
弁士・女弁士・は
やし方。



歌謡ショーに来演したスターと
記念撮影。左端はディック・ミ
ネ。着物の女性は歌手の服部
富子か。上映中の映画は松竹
作品で、1937（昭和12）年公開
の「金色夜叉」と「比翼三度笠」。
城東館は1935（昭和10）年頃
に建て直して城東劇場となり
(通称は「城劇」)、ドイツから
新しいトーキーの機械を買入れ、
トイレも早い時期から金属
紐を引くと水が流れる水洗式
を導入していました。



大正時代の千日前を象徴する名所となった「楽天地」(当時の絵はがきより)

新世界のミニ版としてつくったもので、館内には視覚的な刺激を与える西洋風の見世物が集められました。例えば水族館。海中で泳ぐ魚を観客が上からではなく横から見る。あるいは回転木馬。座っているだけで周りの風景がぐるぐる回る。さらに展望台。高いところからまちが遠くまで見渡せる。こうした新しい視覚体験のアトラクションが集められたのが「楽天地」で、そこには、当然、映画を上映する場所もつくられました。

映画というメディアは演劇と異なって、どこで上映しても中味は同じですが、このとき、大阪と東京では、上映される映画が微妙に異なっていました。当時、東京では「日活」が圧倒的に多かったのですが、大阪で多かったのは「天活」の映画。天活は、千日前から九条や天満まで、都市の

薬問屋だった山川は、映画好きがこうじて千日前で自ら興行を始め、やがて東京の小林喜三郎とともに天活を創始します。その天活大阪の地盤が後に、大阪最大の映画会社「帝国キネマ」に引き継がれていました。

経済発展とともに 醸成される映画文化

こうして、明治末期から映画館は少しずつ増えていました。劇的に増えるのは大正末期のことです。特に、港区、此花区、北区、東成区、西成区。つまり、大阪という都市が次第に拡大し、周辺に工場が増え、労働者が集まり、まちができる、そういう地域に爆発的に増えていったわけです。

一方、日本の輸出額の推移をみると、

中心から周辺を問わず大きな小屋をほとんど押さえていました。それは、天活大阪の支配人だった、山川吉太郎の力によるものです。もともとは船場の

かつて「水の都」と言われた大阪が、この頃から「煙の都」とか「東洋のマンチスター」と呼ばれるようになっていきます。この経済発展とともに映画館数も急増しますが、そこにさらに、1923(大正12)年9月の関東大震災で東京が壊滅状態となり、経済や文化の中心が関西に移ってきます。このとき、大阪は未曾有の好景気に沸き返り、人口は膨張するとともにその市域も拡張され、「大大阪」の時代になったのです。

このとき、大阪の映画産業も大きく成長します。映画の需要が爆発的に増えた結果、地元の映画会社の帝国キネマは、月間15本の大量生産を始め、その中から、全国的に大ヒットした小唄映画「籠の鳥」が生まれます。利益は莫大で、そのお金で今の東大阪市の長瀬に日本一の巨大スタジオをつくりました。

需要の多様化に応えた 映画文化の新たな展開

こうした大阪の繁栄とともに多くの映画館の増加と拡散は、映画館の役割そのものを変えていきます。それまでの映画館は、繁華街や神社といった、非日常的な祝祭空間にありました。けれども、大正末期になると都市周辺の労働者が生活する空間にも映画館が登場します。やがて、それが労働者の社交場としても機能するようになります。

例えれば、西九条の「明治座」では、男子職工が毎日1日、15日の工場休日に映画を見ており、その翌日には職工の家族が映画を観に来ている例が多いことが記録されています。またこの頃に、若い男女も映画館でデートするようになりました。

一方、都市の中心にある映画館の方は、周辺にできた小さな映画館との差別化を図るべく、どんどん高級化していきます。例えば、スターの舞台挨拶が行われ、夏はクーラーで冬は暖房を備え、内装もレッドカーペットが敷かれた豪華版、館内にレストランがありオーケストラもいるというように、場末の映画館ではできないサービスを提供し始めます。その最たる例が、1923(大正12)年にできた道頓堀の「松竹座」でした。

このような映画館のランク差が生じる

にともない、映画を中心から場末に流す配給のシステムやネットワークもできています。

大正末期には、市内で100館近くまで映画館が増えますが、その多くは場末の周辺部にありました。小さい映画館は、余分なお金がないので、高い新作映画は上映できない。だから古い中古映画の上映が中心になりますが、それでも集客力の高い映画がほしい。そこで、主に人気スターの映画をかけるようになっていきます。結果、尾上松之助とか市川百々之助とかの映画があちこちで上映される。つまり、同じスターのいろんな旧作が複数の映画館で上映されることになります。こうして、たとえ封切りを見逃しても、場末で観ることができます。またこの頃に、若い男女も映画館でデートするようになりました。

一方、都市の中心にある映画館の方は、周辺にできた小さな映画館との差別化を図るべく、どんどん高級化していきます。例えば、スターの舞台挨拶が行われ、夏はクーラーで冬は暖房を備え、内装もレッドカーペットが敷かれた豪華版、館内にレストランがありオーケストラもいるというように、場末の映画館ではできないサービスを提供し始めます。その最たる例が、1923(大正12)年にできた道頓堀の「松竹座」でした。

これまで、大阪と映画との関係は東京や京都ほどには論じられてはきませんでした。しかし、本来、大阪は東京に次ぐ映画の大消費都市であり、深く豊かな映画文化の歴史をもっています。それゆえに、その歴史を示す資料も身近なところにまだ豊富に残されているはずです。今私たちにできることは、その資料が迷子になって消えてしまう前に、それらを集め整備し、未来につないでいくことなのだとと言えるでしょう。

鉄の小林一三が梅田につくった「北野劇場」は映画ファンの流れを大きく変えたと言われています。また、戦時中にはニュース専門館が登場し、合わせて映画館数は増え続けます。しかし、ほとんどの映画館は、そのうち終戦までに空襲で壊滅します。それでも戦後は、再び娯楽を求める人々の声に応じて復活し、やがてその黄金期を迎えることになります。

このように、大阪の映画文化は、災害、経済、交通、戦争などが引き起こした都市の変化とともに変わり続けてきました。かつては大阪のまちには、地域ごとに異なる多彩かつ多様な映画文化がありました。それは中央から周辺に、均質均等に拡散したというわけではなく、さまざまな都市の変容とともに、微妙な地域差を生みながらも固有の様相を示していたわけです。

これまで、大阪と映画との関係は東京や京都ほどには論じられてはきませんでした。しかし、本来、大阪は東京に次ぐ映画の大消費都市であり、深く豊かな映画文化の歴史をもっています。それゆえに、その歴史を示す資料も身近なところにまだ豊富に残されているはずです。今私たちにできることは、その資料が迷子になって消えてしまう前に、それらを集め整備し、未来につないでいくことなのだとと言えるでしょう。

スライドショー つづき



城劇の前で。切符売り場の張り紙には「北支事変」入口に「大毎・東日国際ニュース」「朝日世界ニュース」の張り紙も。1937、38(昭和12、13)年頃の撮影か?



戦後、配給会社を松竹から大映に変更し、「大映城劇」となった頃の館内。左右の「DAIEI KYOGEKI」の文字が目立つ。スクリーン前には当時の人気スター片岡千恵蔵主演の「三十三の足跡」予告。同映画は1948(昭和23)年公開。



昭和30年代後半に配給会社が再度変わり「城南東映」と名を変えた城劇。昭和40年代は高倉健の人気シリーズなどを上演。この後、同館は1973(昭和48)年3月まで営業。



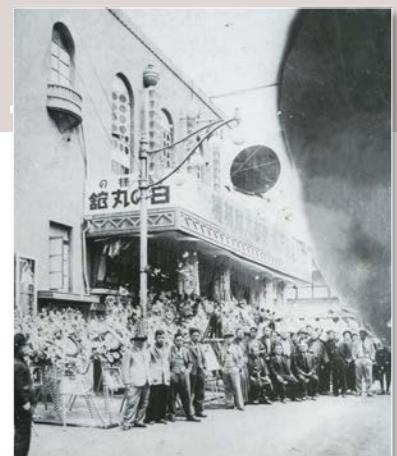
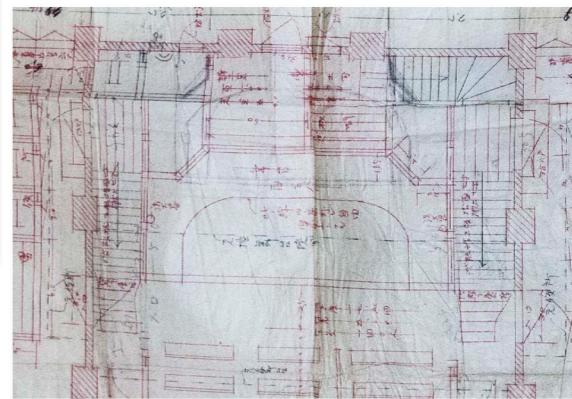
昭和30年代後半に配給会社が再度変わり「城南東映」と名を変えた城劇。昭和40年代は高倉健の人気シリーズなどを上演。この後、同館は1973(昭和48)年3月まで営業。

劇的変貌を遂げた鶴橋界隈 ~井上平八郎さん所蔵資料より

昭和の初め頃に「昭和館」を開館したのを皮切りに、ご親族で鶴橋界隈で複数の映画館経営を展開し、最盛期には、「日の丸館」「パーク館」「電気館」を加えた4館を経営。



昭和館の1階の平面図。スクリーン前にはオーケストラボックス。小さな舞台があって、実演もできた。2階の観覧席は桟敷席(枠席)で、階段を上がるところが下足預り所。ドームのような天井で、装飾を施してあり、シャンデリアもあった重厚な内装だったという。



現在の勝山北5丁目にあった日の丸館の外観写真(東朝日という映画館を買収して開館)。1935(昭和10)年に改築開館した際の記念写真で、ひさし横には「皆様の日の丸館」、正面には、「○○○東部大封切場」の文字。同館は戦後も営業し、昭和30年代後半に閉館した。

●コメント&フロアトーク よみがえる身近なまちの映画館の姿と生活史

往事の映画文化についての坂本さんの実体験談、また、建築史や大衆文化史の専門家それぞれのお話をうかがい、来場の方々からのお話も合わせて、まちの今昔を見つめました。

コメンテーター 坂本 健一 氏（青空書房店主） 古川 武志 氏（大阪市史料調査会調査員）
橋寺 知子 氏（関西大学環境都市工学部教授）



■まちと映画がごく身近にあった時代を生きてきて



坂本健一氏（さかもと・けんいち）
古書店「青空書房」店主

1923年、大阪市生まれ。大阪の焼け跡に青空書房を創業。先年、高齢のために一度店を閉じたが、ファンの声に応え、現在は路地の自宅で営業。有名作家との交流も多く、雑誌などにも寄稿。独特の味わい深いイラストも好評。著書に『ほんじつ休ませて戴きます』(2013)、「だれにも一つの青空がある 大阪『青空書房』店主90歳、休業ポスターに込めた人生の応援メッセージ』(2015)、「浪華の古本屋 ざっこんぱったん』(2010)など。

映画とともにあった私の人生

私の生涯を通じて、ずうっと身近にあったのは、女房と（笑）、次は映画。私の93という歳の大半は、映画とともにありました。

私が子ども時分に観た映画はモノクロで、忍術映画が多かった。自来水、児童也とかね。あれはぱっと消える。当時の映画技術でも、それくらいは楽にこな

せた。そして映画がピークをなしたときも、やはり忍術物に良作があった。村山知義さんの原作で「忍びの者」。なかなか、しぶくていい作品でした。当時は、まだ忍術使いで、忍者とは言わなかったと思う。彼らのたいへん厳しい境遇と心身が鍛えられていく辛い状態を、村山知義さんは非常にうまく表現していました。

私の住んでいるまちの映画館では、花道がついていました。それは、昔は芝居小屋だったから。今度は、その花道が邪魔になり、取っ払って通路になった。一番後ろに売店があり、ここでおばさんが休憩時間になら、「おせんにキャラメル、酢昆

に増えましたが、1970（昭和45）年頃には、火が消えたように全部なくなつた。こうして映画という私にとってかけがえのない懐かしい文化が消えました。

映画館が生活の側にあった時代

最初のころ、映画は、モノクロで声は出なかった。スクリーンがあり、その前にせいぜい幅2メートルあるかないかのステージがありました。その前にあったのがオーケストラボックス。映画のスクリーンの前にくぼみがあって、楽団の人がそこに入っていました。和洋合奏で、ジャズなんかができる人と長唄とか淨瑠璃とかの演者がここにいっしょにいました。

私の住んでいるまちの映画館では、花道がついていました。それは、昔は芝居小屋だったから。今度は、その花道が邪魔になり、取っ払って通路になった。一番後ろに売店があり、ここでおばさんが休憩時間になら、「おせんにキャラメル、酢昆

布～」と売りに回っていました。その光景を、私は懐かしく思います。私が子どもだった、70、80年前のことです。しかし、その酢昆布が、まだ健在（笑）。映画館が消えてもしぶとく生き残っている。

「〇〇座」という名の映画館はおそらくかつては芝居小屋だったのであります。2階の棟敷はその名残。正面は特等席で、料金もちょっと高いのですが、お茶子さんが、たばこ盆を持ってきてくれました。

私たちが住んでいた下町の映画館は、スクリーンの後ろあたりに通路があつた。そこを幕で入れないようにしている。その後ろにトイレがあって、また、近くに小さな祠もありました。つまりトイレと祠が並んでる（笑）。

その映画館が、今はコンビニに変わったのですが、この屋上の駐車場には祠が残っています。昔は年に1回くらいお祭りがあって、商店街を練って歩いた。そんなふうにまちと映画館がくつき、市民生活の中に映画が入り込んでいました。

私は映画館を考えるときに、手風琴（アコーディオン）を思い出します。手風琴のやさしく、広がる音。それは呼吸音と同じ。

もう一つ思い出すのは臭いです。映画館と臭い。でも、いい臭いと思いますか？違うんです。さっき言った、映画館のカーテンの向こう側が、防災上規定があつた

のか、広く開けてあり、そこにトイレがありました。その臭いが館内に流れ込んでくる。だから、トイレの臭いをかぐと映画を思い出す（笑）。逆に古い映画を観ていると、臭いを思い出す（笑）。今は、どこも清潔でトイレ臭などしませんが、ふるーい駅とかに行くと、時々そういうトイレにお目にかかります。その臭いをかいだ途端に映画を思い出すわけです（笑）。

復興を支えた日本の映画

市川雷蔵の「眠狂四郎」、勝新太郎の「座頭市」というと1960年代から70年代。

シリーズの最後の頃はもうチケットを買って映画館に入る人も少なくなっていた時代。

でも、どちらも映画ファンとしてはわくわくするような作品。映画でなつたら見られない迫力と息詰まるような殺陣でしたね。

戦後、すべての娯楽がなくなり、世の中が非常にわびしかなった。そんなとき、日本人に大切なことを伝えてくれたのも映画だったと思います。

敗戦で、日本という国が落とされ、貶め



天神橋筋六丁目交差点付近では、1935（昭和10）年頃には、路面電車が走り、映画館が並び、時には大きな天幕が張られ、サークスがやってきた。

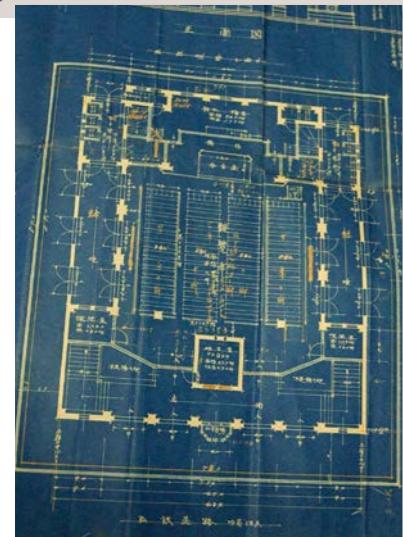
られた。チャンバラ映画も封ぜられた。しかし、映画は確かに日本人を勇気づけてくれたと思います。きっと復興にも影響した。でなかつたら、あの惨めな敗戦の屈辱の中から立ち上ることはできなかつた。私はそう自分勝手に思い込んでいます。

映画の最後の時は、例え、客席が揺れるようになってみたり、においを流したり、立体音響にして足の下から伝えられるようにしたりと、あらゆる方法を考えた。でもそういう手練手管で、技巧だけで映画という文化がもつものではない。

やはり、一つの時代が終わり、一つの文化が消えていく。それはしかたがないものだと思います。それが人生というものだというのが、私の考え方です。

スライドショーやつづき

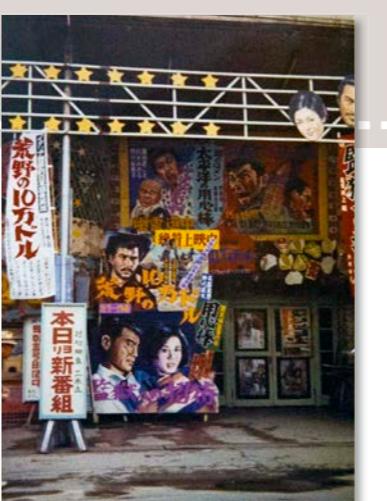
日の丸館のものかと思われる映画館の1階平面図。舞台前には「奏楽室」、2階への階段下2カ所に「下足預り処」の記載など。男性席、女性席があり、便所も男女に分かれている。弁士の控え室もあった。



1945（昭和20）年1月11日から17日の正月興行成績報告書を見ると、初日642人、日曜885人、最終日142人という記載、上映映画は戦時色が強く、「将校生徒の手記」「かくて神風ぞ吹く」。



1955（昭和30）年頃の電気館。市川雷蔵主演の「いろは囃子」は同年公開の大映作品。「風流交番日記」は新東宝作品。「夜の部八時より 全部見られます」の立て看板。映画最盛期の頃、電気館は常にお客様の自転車で溢れていたといふ。



1967（昭和42）年の電気館。同年公開の大映作品、田宮二郎主演の「監獄への招待」と大映配給のイタリア西部劇「荒野の10万ドル」を上映中。次週予告には、藤田まこと・白木みのるコンビの「てなもんや幽靈道中」。この後、同館は昭和40年代末まで営業し閉館。



無声映画「丹下左膳」を上映中の映画館。舞台脇に弁士、スクリーン前のボックスにはオーケストラ。2階席の人影も描かれている。



1



2

まちに漂うモダンの香り～坂本健一さんが描くイラストの世界

今年で93歳の坂本さんは、若い頃から大の映画好き。戦前から始まり、戦後の映画の最盛期から衰退期にかけて、ご自身で体験し感じてきた映画の世界をイラストで表現しています。



天神橋筋六丁目交差点付近では、1935（昭和10）年頃には、路面電車が走り、映画館が並び、時には大きな天幕が張られ、サークスがやってきた。

まちに漂うモダンの香り～坂本健一さんが描くイラストの世界

今年で93歳の坂本さんは、若い頃から大の映画好き。戦前から始まり、戦後の映画の最盛期から衰退期にかけて、ご自身で体験し感じてきた映画の世界をイラストで表現しています。

復興を支えた日本の映画

市川雷蔵の「眠狂四郎」、勝新太郎の「座頭市」というと1960年代から70年代。

シリーズの最後の頃はもうチケットを買って映画館に入る人も少なくなっていた時代。

でも、どちらも映画ファンとしてはわくわくするような作品。映画でなつたら見られない迫力と息詰まるような殺陣でしたね。

戦後、すべての娯楽がなくなり、世の中が非常にわびしかなった。そんなとき、日本人に大切なことを伝えてくれたのも映画だったと思います。

敗戦で、日本という国が落とされ、貶め

られた。チャンバラ映画も封ぜられた。しかし、映画は確かに日本人を勇気づけてくれたと思います。きっと復興にも影響した。でなかつたら、あの惨めな敗戦の屈辱の中から立ち上ることはできなかつた。私はそう自分勝手に思い込んでいます。

映画の最後の時は、例え、客席が揺れるようになってみたり、においを流したり、立体音響にして足の下から伝えられるようにしたりと、あらゆる方法を考えた。でもそういう手練手管で、技巧だけで映画という文化がもつものではない。

やはり、一つの時代が終わり、一つの文化が消えていく。それはしかたがないものだと思います。それが人生というものだというのが、私の考え方です。

■モダンシティーに映画と音楽が溢れていた時代



古川武志氏（ふるかわ・たけ
大阪市史料調査会調査員

1971年、泉大津市生まれ。佛教大学博士課程文学研究科日本史学専攻修了。専攻は日本近現代史(特に大衆文化論)。レコードのSP盤のコレクターとしても知られ、古き良き時代の音楽を演奏する「大阪樂団」の顧問兼指揮者を務める。著書に『モダン道頓堀探検』(共著、2005年)ほか、またオムニバスCD『ニッポンジャズ水滸伝』(天・地・人之巻、2012、2013、2016)ブックレットにも原稿執筆。

映画興行の発祥の地は 大阪の難波

日本の「映画興行の発祥の地」は大阪で、今のなんばマルイのところだという話は、聞かれたことがあるでしょう。今でも1階のエレベータ横に「映画興行の発祥の地」と書かれた銘板が残っています。元は「南地演舞場」。稻畠勝太郎という人が、フランスのリュミエールから機械を買ってきて、そこで映画を上演したそうです。

ちなみに、映画や興行では、ミナミは松竹が大体握っていました。ところが、あそこだけは今も「TOHOシネマズ」ということで、宝塚が握っている。

実は「南地演舞場」を仕切っていたのが、阪口祐三郎という人で、南地大和屋の主人でした。彼が、そこを再開発しようとす



なんばマルイの1階のエレベータ横にある
「映画興行の発祥の地」と書かれた銘板

個人的な観点からも、僕は泉州の田舎なので、ちょっとした映画を見るには、車に乗って「南街会館」まで行ったものです。自分のまちにも映画館はあったのですが、封切を観るとなると、やっぱりンバまで出た。そういう意味で、ミナミいうのは、映画と一体化してあったとい気がします。

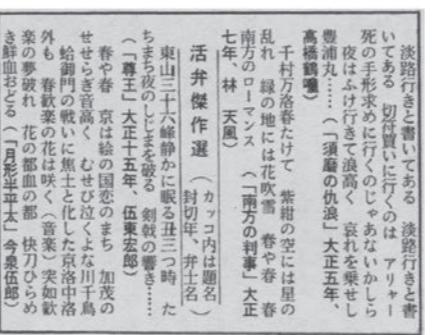
無声映画の時代とジンタの響き

無声映画の時代に使われていた音楽
ジンタと呼ばれていますが、それはいつ
いどんな音楽だったのでしょうか。

ということで、1907(明治40)年頃に録された「天然の美」をお聞きください。

ジンタというのは、この「天然の美」に表されるような音楽です。日本人はワツが好きで、3拍子の曲に大ヒット曲が多い。それが、「ジンタッタ、ジンタッタ」とるから「ジンタ」と呼ばれた(笑)。

明治時代、西洋音楽が日本人のなかに



活弁がスターだった時代、数々の名調子も生まれた。
「活弁時代」(『実記 百年の大阪』読売新聞大阪本社
社会部、1987年)より

でしょう。映画スターもいるのですが、活弁の方も、登場すると、「いよっ！待ってました！」と大向こうから声がかかる。当時、活弁はその映画館の一大看板でした。

そういう、無声映画のスター活弁も、トーキーの時代になって失業します。東京で有名な徳川夢声や大辻司郎も漫談の方に行くわけです。大阪では、先ほどの泉詩郎は、コロムビアと契約して、流行歌をストーリー仕立てで解説したレコードを何十巻と出した。まるで映画を観ているが如く語りを入れるわけですが、これがよく売れた。それが「歌謡曲説明」。そこに登場してくるのが、西村小楽天でした。師匠は西村楽天で、もとは東京の講談師で大阪に流れてきた人。「楽天」の名は、ひょっとしたら「楽天地」と関係しているかも知れません。岡晴夫や美空ひばりが歌う前、前奏が流れてくると解説を入れるわけです。活弁そのものは消え去りましたが、この流れが、浜村淳さんや玉置宏さんとかにも受け継がれていました。

では、当時の千日前の音楽を聞いていただきます。「敷島倶楽部」の敷島管弦団による「ウイリアム・テル序曲」です。

大阪のまちなかのモダニズム

みなさん、この演奏を聴いて下手やな
あと思いますか？ それとも上手いなと思

いますか？ 実は、山田耕筰という人が、日本で初めてのオーケストラ、日本管弦楽協会をつくったのが1914(大正3)年です。一方、この「ウイリアム・テル序曲」の演奏が1921(大正10)年。7年しか経っていないのですが、その間に、大阪でも一応これだけの演奏ができるようになっていた。音楽学校を出ている人ではない、映画館の楽団員。そう思うと、大阪人の進取の気性というか、技術的なレベルも結構高かったことがわかります。またこういう音楽が、まちなかに流れていて、普通に聴かれていたということ。音楽や映画は、大阪のまちのなかで醸されていったモダニズムそのものだったわけです。

ちなみに、肥田悟三先生が言っておられたましたが、日本で最も古くから今も続いている映画館は、恐らく千日前の「敷島」だろうと。明治時代からずっと続いていて、今も「敷島シネポップ」という名前で映画を上演しています。これも宝塚の系列。

最後に、その「敷島シネポップ」前にあつた「大劇（大阪劇場）」の写真帳を紹介します。「東洋劇場」と書いていますが、後に「大劇」になります。

あちこちに話が飛びましたが、大阪と
いうまちと、映画、音楽が、当時から今も
まちの記憶としてあり続けているというこ
とが理解できると思います。



■まちの記憶と建築資料の間から見えてくるもの



橋寺知子氏（はしてら・ともこ）
関西大学環境都市工学部准教授

1965年、神戸市生まれ。1993年、関西大学大学院博士課程修了。博士（工学）。専門分野は近代建築史、「大阪の近代」にさまざまな角度から眼を向ける研究を続けている。著書に『関西のモダニズム建築－1920～60年代、空間にあらわれた合理・抽象・改革』（共著、2014）、『アジアにおける文化システムの展開と交流』（共著、2012）、『アジアが結ぶ東西世界』（2011）ほか。

建築に関する資料の意味と楽しみ方

今回は、建築に関する資料がどういう意味をもつのか、あるいは、どういうところが面白いのかについてお話をしようと 思います。

では建築資料というはどういうものでしょうか。今会場に並んでいるものように、図面や写真だけでなく、建築の仕様書とか確認申請書とかの届出書類なども建築資料ということになります。

そのなかでも、やはり写真類は非常に重要です。工事中のものや竣工時の写真是もちろん大切ですが、歴史的には完成後の、使っている際の写真も貴重なもので。しかし、そうした写真を撮るのはよほど建物好きの人で、数はとても少ない。その意味で、人が建物の前に立っているような記念写真などにも、十分に価値があるものがあります。

もう一つ、建築専門誌に、こういう建物

「建築と社会」昭和13年1月、2月号に掲載されていた映画館等の写真



梅田娱乐街全景



左：北野劇場、右：梅田映画劇場



梅田地下劇場 内部



梅田映画劇場 内部

「中村儀右衛門資料」からわかること

明治から大正にかけて道頓堀や千日前で活躍した大工棟梁が持っていた資料群に「中村儀右衛門資料」（関西大学なにわ大阪研究センター蔵）があります。全455点のうち約300点が建築関係資料。多くは芝居小屋のものですが、これらの特徴は、設計や施工をした人が持っていたもので、設計変更や検討内容など、途中資料も多く含まれていることです。

この資料の中に映画館と思えるものが何点かあります。例えば、「電気館」と裏に朱書きしてあるものは、「大火の後」と書いてあり、南の大火の後に仮設的に作った図面だとも思えます。同じく「大参電気館」のメモがある図面は、下側が道路で、そちら側が入口、また真ん中に「写真室」とあって、たぶん映写室がある。この館には2階があり、3階の図面もありました。その3階には「運動場」とありますが、それは多分、少し広めのバルコニーのようなところで野外かもしれません。この3階には左右に塔みたいなものが付いています。

もう一つは「小櫻館」の図面。「映写室」「変更」と書いています。手前のところには「増設」とも書いてあって、もともと芝居小屋なのか寄席なのかわからないですが、それを改装して映写室をつくったのではないかと思える図面です。舞台のところの拡大図には、楽屋は「在来のとおり」と書いてあって、その手前には「縮小」と書いてあります。資料を読み込んでいくと、設計が変わっていった過程が見えるわけです。

さらに座名不詳の資料。下側に千代崎橋筋と道路名が書いてあります。2階は馬蹄形のエプロンになっていて、椅子席もあります。この館にも、2階両側に「塔」と書いてあって丸い物がついている。玉造の「城東館」もそうですが、両脇に塔がついた例が意外に多い。例えば、当時有名な映画館だった「芦辺俱楽部」にも両側に塔がありました。こうした建築的な特徴は他所にも伝播するのではないかということが言えると思います。

「四ツ橋俱楽部」は、長い平面の建物ですが、図面の舞台のところに「弁士控え室」と書いてあり、奥には弁士用の手洗いがある。先ほども話題に出ていましたが、舞台両脇にトイレがあるのが映画館の定番だということがわかります。

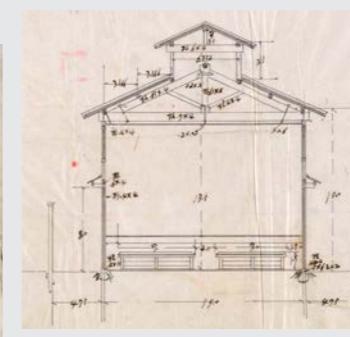
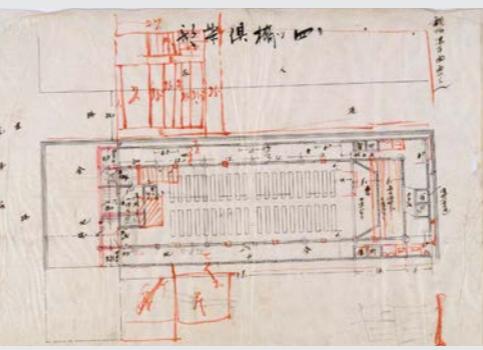
この資料群では、平面の図面がほとんどでしたが、大工さんは、こういう平面図があれば、だいたいどうつくるかの想像がつくわけです。だから図面類がきっちり揃ってない例も多いのですが、「四ツ橋俱楽部」には、断面図や仕組みが分かる図

もあります。こういう資料があると数値なども正確に探していくことができます。

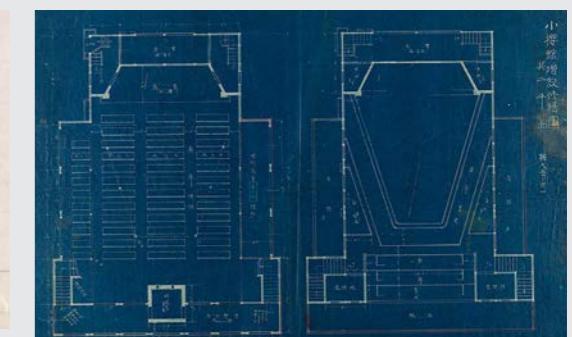
また、仕様書、適要書と呼ばれる、文字で書いた資料もあります。「第一電気館」と書いてあるものは、「寄席」を消して「小劇場」となっていますが、「電気館」だから映画館かと思われます。筆書きの文字がいろいろあり、訂正に訂正を重ねている。下書きか控えの図面のようです。仕様書には、木造だけれど「洋館造り」、「スレート葺き」と書いています。併せて見ることで、写真の映画館が、石造みたいに見えるけ

れど本当は木造だと、どういうスレートなのかななどを理解することができます。この中村儀右衛門資料には、写真資料がほとんどありません。しかし、こういう、設計者あるいは施工者の建築の専門の資料、それも考え直したりしている途中的図は非常に貴重です。それとは別に、写真などの資料類や実際に行ったことがある方の記憶とかがわかるような資料も大切。この両者が合わさっていくと、そこからわかっていくことがたくさんあるはずだと思います。

中村儀右衛門資料のうちの映画館関係の図面



「四ツ橋俱楽部」の平面図(左)と断面図(上)
朱で変更案(?)が描かれている。



「小櫻館」増設修繕図 劇場から映画館への改修か。
関西大学なにわ大阪研究センター蔵

■ご来場の皆様からコメント

『ぜんぶ大阪の映画やねん』著者の 武部好伸さん からのお話



武部好伸氏
(たけべ・よしのぶ)
エッセイスト

1954年、大阪市生まれ。大阪大学文学部美学科卒業。読売新聞記者を経て、1995年からフリー。関西大学非常勤講師、日本ペンクラブ会員。著書に、「ケルト映画紀行 名作の舞台を訪ねて」(1998)、「シネマティック 銀幕のなかの洋酒たち」(1999)、「ウイスキー アンド シネマ」(2014)ほか。

僕が生まれたのは、ここから北西へ300mほどのところ、今の中央区龍造寺町です。幼稚園は銅座幼稚園で、小学校は谷町四丁目の南大江小学校。中学校は天満橋にあった東中学で、高校はこの近所の清水谷高校。つまりほぼこのあたりだけで育ったわけです(笑)。

僕は2000(平成12)年に『ぜんぶ大阪の映画やねん』という本を出しました。そ

映画とともにあった生活や幼き日の思い出

の際に、織田作之助の映画「夫婦善哉」や「わが町」、また「王将」「ガキ帝国」「ブラック・レイン」とか、大阪を舞台にした映画や大阪人を主人公にした映画を同書ですべてリストアップしました。

それで自分では一段落つけたつもりでしたのですが、昨年、ある人から「武部さん、そろそろ第二弾を書きなはれ」と言われました。確かにもう16年も経っている。そこで今年の正月からあれこれ一生懸命に調べて、現在原稿を執筆中です。その結果、大阪と映画についての大発見をしました。今は言えませんが(笑)。

ただ、大阪人がすごく映画にかかわっていたことだけは確かです。実際、活弁の第1号は上田布袋軒という大阪は新町生まれの人。日本最初の映画界の大スターは駒田好洋で、ジンタやりながら、巡業していたその人も、もともとは大阪の人間。それから日本最初の映画の文献も、稻畠勝太郎さんが持ってきたシネマグラフの解説書で、天満橋の出版社で発行したものです。だから映画草創期のことを考えれば、

大阪はものすごく映画にとって大事な場所です。

自分の子ども時代の思い出としては、なんと言っても松屋町の末吉橋のところにあった「中央シネマ」で、よく行っていました。一番覚えているのは「マタンゴ」という東宝の怖い映画。ほかにもなつかしい思い出がいっぱいあります。

上六の映画館にも行きましたね。それでちょっとよそ行きで映画を見るときはミニマです。上本町二丁目から市電に乗って行く。長堀川の川べりを走って行く光景をよく覚えています。子どもながらに、そんな風に浸りながら心斎橋へ。そこで降りて、アイスクリームを食べる。親父は必ず四つ橋をぐるりと歩いて渡りました。それからミニマに行って、そこで映画を観ていました。

上六ならつっかけで行けたが、心斎橋はちょっと微妙。梅田の北野劇場に行くときは大騒ぎで、僕も母もよそ行きの格好。いろいろな意味で確かに、大阪では庶民の生活と映画文化が密接に関わりあっていました。

【城東館】関係の資料をご提供いただいた 水野千鶴子さん からごあいさつ



大正時代、祖父が「城東館（後に城東劇場・城劇）」を玉造駅前に開館。その事業を引き継いだ父親を1945年8月14日の空襲で失うが、かろうじて残された映画館を母親が苦難の中で運営するのを協力して支えた。

水野千鶴子氏（みずの・ちづこ）
玉造で映画館「城東劇場」を運営

玉造で映画館をしておりまして、「城劇」の名でみなさんにかわいがっていただきました。戦前は松竹の映画で、戦後は大映、それから東映となりまして、結局1973（昭和48）年に閉館いたしました。

戦争中、私どもの映画館は鉄筋でしたので、軍隊に軍需工場として徴収されるこ

とになっていたのですが、屋根が瓦だったので免れた。でも、父は1945（昭和20）年8月14日の空襲で近くの防空壕で爆死しました。その後、母がほんの2、3人から映画館を再開し、戦中・戦後もおかげさまで映画を続けさせてもらっていました。

今日は母の17回忌です。その帰りにちょっと寄せていただきました。残っていた写真を見ていただいて、今日もこうして皆さんにお目にかかる機会がえられました。ありがとうございます。

コメンテーター・青空書房店主の 坂本健一さん から、もう一言

今も元気で作家活動をされている筒井康隆さんの本に『不良少年の映画史』（文春文庫）というのがあります。彼のお父さんは博物学者で、一時期、天王寺動物園の園長もやっておられた方。筒井さんは少年時代から非常に英才で、優秀な子だけを集めた

芦池小学校に通っていましたが、戦後も天神橋筋六丁目を降りて、乗り換える際に私の店にちょこちょこやってきました。その理由は、実は、お父さんの本を持ち出して売りにきてたんですね（笑）。そうしたお金で、彼はあっちこっちで映画を観た（笑）。その時分、焼け野原で会う不良少年たちは、たいがい荒んでおりましたが、筒井さんはシャキッと背筋が伸びた少年でした。私はのちに、その姿を絵に描いたのですが、その時に他の戦災孤児に似てるよう描いたら、「僕は、こんなん違う。もっとちゃんとしていた」と本人から抗議が来た（笑）。それで、私の本には描き直した絵が出ています。

筒井康隆という作家をつくったのは、あちこちの映画館で観たいいろいろな映画。偉大な作家の才能が、それによってますます啓発された。彼は現在も見てくれと違い、実際は非常に健常な人で、人に心配りができる優しい方です。



交流会では活動写真のジンタの再現演奏も



飛び込んだ世界には、活動写真の樂士たちが！

林幸治郎氏（はやし・こうじろう）

ちんどん芸能集団「ちんどん通信社」代表（社名は「東西屋」）

1956年、福岡市生まれ。1981年、立命館大学経営学部卒業と同時に大阪の老舗ちんどん屋「青空総合宣伝社」に入社。1984年「ちんどん通信社」旗揚げ。1997年、有限会社「東西屋」を設立。全国での活動のほか海外公演も20数回におよぶ。著書に『ぼくたちのちんどん屋日記』（共著、1986）、『ちんどん屋です』（共著、1993）、『チンドン屋！幸治郎』（2006）ほか。

私は、ちんどん屋の世界に入って35年ほどですが、初めの頃は、もとは活動写真の樂士だった方が幾人か残っていました。なかでも大野さんは、昼間はちんどん屋をしながら、夜は北新地でピアノを弾くバンドマン。私を仕事に連れて行ってくれながら、活動写真時代の話もよく聞かせてくれました。昔の仲間を集めた無声映画の上映会などがあったときには、活動写真で使うお囃子を教えてくれたこともあります。

それより以前の話ですが、私の父親が1920（大正9）年生まれで、若い頃から「目玉の松ちゃん」こと尾上松之助など、映画の大ファンでした。だから、酔っ払うと必ず当時の歌とかが出てくるわけです。

～花のパリーか、チンドンか

～ああ、春爛漫のロマンス

父親がこんな名調子をよく口にしていたのを私は子どもの頃に聞いていて覚えたわけです。

それから、和物の無声映画のお囃子もの

では、常には「吾妻ハ景」などがよく演奏されていたようです。

～東山三十六峰静かに眠る丑三つ時

鴨の河原の静寂を破り、

にわかに起る剣戟の響き！

こんな名調子や演奏をバックにして、チャンバラの場面が出てくるわけです。

昔はこうした活動写真の音楽をハーモニカで吹く人も多く、楽譜も出版されていました。以前に私は、四代目の旭堂南陵さんから楽譜をたくさんいただいたのですが、同時にいろいろと教えてもらいました。この曲はこんな場面、水のシーンではこんな音、舟が出てきたらこうと、決まりごともいろいろありました。



それから、「竹になりたや」という曲があります。これは親子の別れなど、深い情愛を描くような場面によく演奏されました。

次に、「三十三間堂」。こうした曲はいわばスタンダードナンバーで、寄せ集めの樂士であっても、みんなが演奏できるわけです。また、「大行列」。松の廊下など、大名がひとりずつ参上するような場面では、こういう曲が出てくる。

和洋合奏の形態がつくられたのも無声映画時代の映画館でした。日本調の場合には三味線など和樂器で、洋物でキーンなどをやるときは洋楽器が基本ですが、時には両方を使う。

しかし、映画がトーキーになり、仕事が次第になくなってくると、樂士からちんどん屋に移る人が出てきたわけです。

それでは「乱刃」。これは「血煙高田馬場」（1937〔昭和12〕年公開）という、阪東妻三郎主演の名作のラストシーンに使われたものです。最後は、この曲でしめさせていただきます。

